

たっても、100余年の歴史をつないできた渋沢翁の創業精神を受け継いでいかなければならないと考えています。

ところで、渋沢翁は会社を創るけれど、その後の経営は誰かに任せています。京阪電気鉄道(株)の場合、渡邊嘉一という人物がいました。初代経営トップを務め、「技



術の京阪」という評価と社風の礎を築いた人物ですが、主に鉄道会社で、技術面から渋沢翁を支えたことが多かったようです。それだけ人を見る目もあったということですが、財閥を創らず、自らの利益より社会への貢献を考えられて行動する。その原点はどこにあるのでしょうか。

井上 渋沢栄一は、企業の事業そのものが世の中に貢献できるようにしなければいけないと考えていました。「道徳経済合一説^(※1)」で主張する一つは、まず第一に考えるべきは自分の利益ではなくて、相手の利益なり周りの利益である。まさに公益の追求です。会社はその経営を維持するために利益を上げないといけません。それを決して否定していませんが、その利益は世の中のための利益であって、世の中が豊かになるためのものであることを忘れてはいけません。自らの利益を得るだけのために、事業を立ち上げるのではない、と。

そんな聖人みたいな発想がどこから生まれて来たのか。一つは初めてヨーロッパに行った際に修得し、共鳴した「合本主義^(※2)」でしょうか。鉄道敷設に技術者渡邊嘉一と力を合わせ、多くの実績を上げていったのも、その現れだと思います。もう一つは、江戸時代の幕藩体制社会において、当時の領主は農民から搾取して利益を一極集中させようとする意識が強かったんですね。この独占が良くない、領民が豊かにならないと領主も豊かにならないだろうという思いは、農民出身の渋沢の人生に大きな影響を与えました。そこが、原点かもしれません。

加藤 渋沢翁は「士魂商才」の方だったんでしょうね。商才は当然持たれていたでしょうが、世の中の役に立つための原点としての士魂、つまり道徳を強く意識された

方だと感じます。

※1 企業の目的が利潤追求にあるとしても、その根底には道徳が必要であり、国ないし人類全体の繁栄に対して責任を持たなければならないという考え方
 ※2 公益を追求するという使命や目的を達成するのに最も適した人材と資本を集め、事業を推進させるという考え方

「第2の創業」で、次世代に残す事業を立ち上げる

井上 渋沢栄一が事業を始める際の基本的な考え方は、「公益を目指す良い事業」「道徳に基づく正しい利益追求の経営」です。ただ、それだけではありません。「今、これをやるべきか、時をちゃんと読み解かねばならない」ということも言っています。正しいことであっても、今やってはそれほど意味がないこともある、と。時代背景、周りの業種の方々の動向もちゃんと見極めたうえで、先をしっかりと読んでいかなないとダメだ、と言っています。

加藤 経営者として非常に参考になります。「第2の創業」を掲げているのですから、次の世代のために残せるような新しい事業を創っていかなければならない。その事業は今お聞きした3つの要素を満たすことが大切だと改めて思いました。

新事業として今、注力しているのは、「BIOSTYLE (ビオスタイル)」という、「健康的でクオリティの高い生活」の実現と循環型社会に寄与するライフスタイルを提案する事業です。今後、環境や健康に配慮したライフスタイルはますます広がりを見せていくと考えています。そのコンテンツを、京都・四条河原町に建設する複合施設で展開したいと考え、準備を進めています。この「BIOSTYLE」を「安全安心」に次ぐ新たな京阪ブランドとして発信していきたい。社会に貢献し、次の世代に残す事業として実現に向けチャレンジし、ぜひ成功させたいと思っています。これはまさに渋沢翁の精神を受け継ぐものだと思っています。

